長期ビジョン審議会 第３回総会 議事概要

１　日　時：令和３年10月15日（金）13:00～15:00
２　場　所：オンライン開催
３　参加者
　委員：五百旗頭会長、赤澤委員、頴川委員、尾山委員、勝沼委員、笹嶋委員、志智委員（幸田代理）、杉本委員、摺河委員（柳代理）、高品委員、谷口委員、タマシ委員、築山委員、突々委員、那須委員、平田委員、古山委員、諸富委員、葭岡委員、吉富委員、吉本委員、井上委員、佐久間委員、松元委員、大川委員、山本和樹委員、藤本委員、門田委員、木築委員、岸委員、山本益嗣委員（計31名）
　県側：齋藤知事、谷口政策創生部長、坂本参事（ビジョン担当）、城谷局長、木南課長

４　議事
（1）開会
○齋藤知事
　審議会にご出席いただき感謝申し上げる。緊急事態解除後、コロナは収束傾向にある。この間、皆さんにご協力いただいたこと、改めて御礼申し上げる。ただ、引き続き予断を許さない状況である。何とかコロナを収束させていきたい。
　本日、新ビジョンの策定について議論いただく。グローバル化やデジタル化、本県も人口減少社会への移行ということで先行きの見えない中、コロナに見舞われた。これから新しい兵庫県をつくっていくという意味で、今ビジョンを策定することには大きな意味がある。今年度内に皆さんと一緒に兵庫の将来像を示す新しいビジョンをまとめていきたい。
　今日は新ビジョンの基本的なコンセプト、構成を示した骨子案についてご議論いただく。めざす兵庫の姿として、すべての方々が希望を持って生きられる、可能性が広がっていく、そんな躍動する兵庫をつくっていきたい。県民の皆さんからも、新しい兵庫県をつくってほしい、新しい発想でやってほしいという想いを聴いてきた。一方で兵庫県は広く、様々な地域や文化がある。守るべきことは守りながら、時代に合わせて変えるべきことを変えていく視点も重要だ。皆さんと議論する初めての機会であるので、五百旗頭会長はじめ委員の皆さんからご意見を頂戴し、充実した意見交換にさせていただきたい。

○木南課長
　（委員の過半数の出席により会議が成立していることを報告）

（2）協議

○五百旗頭会長

150周年を迎えた兵庫県が、齋藤新知事を迎えて再出発するこの時期にビジョンの協議をすることを、大変意義深く感じている。

100周年は、金井知事の時で、金井知事は101年目からは、日常的に都会と農村が入り合う兵庫県をつくりたい、都会の人は自然豊かで食べ物がおいしい農村部で一定期間を過ごし、農村の人も都会へ行くといった形で交流の密度を高めようということを提案していた。当時は高度成長期で、所得が10年で２倍になるという時期だったが、今はそのような時期ではなく、低成長の中で、成熟した、質的な豊かさをめざす新しい試みが必要な時期だと思う。今日は皆さんからいろんなアイデアをいただき、齋藤県政の出発に当たっての意義深い集まりになればと思う。

○木南課長

（資料1説明）

○五百旗頭会長

では、意見交換を進めていきたい。最初に諸富委員。

○諸富委員

第３部「Ⅳ自立した地域経済」「Ⅴ持続可能な社会」を合わせるような形でコメントさせていただく。骨子案を拝見し、「自立」という言葉が入っていて非常に良いと感じた。兵庫県には、いろんなポテンシャルを持った地域がある。それぞれの地域資源や、人の力を活かし、それぞれが、完璧な自立は無理だが、自立した経済に向けて動いて行く、力を合わせていくことがとても大事だと思う。かつてのように企業誘致や公共事業で何とか地域を活性化するという時代ではない。地域の資源を使って地域で自らを豊かにしていくような組織化をしていく工夫が必要だ。そのような試みに対して、県として支援していくことができないか。

私が全国でお手伝いしているのは、一言で言えば、エネルギー自治の取組だ。再生可能エネルギーをプロジェクト化して、その事業収入で地域を豊かにしていく。キーワードは地域経済循環ということになるが、全国でそうした取組を支援している。再生可能エネルギーだけでなく、農業や観光、その他いろんな可能性がある。

第４部「実現に向けて」の基本姿勢は４つともすべて大事だ。各地域で目標を立て、地域の資源を見直し、何ができるかを考える。目標を立てた上で、重点プロジェクトを推進する。あるいは、ステークホルダーが参加する会議体を作ってプロジェクトを進める。こうした「自治」をやっていくことが大切だ。

対話と学びの場については、岡山県真庭市、愛媛県内子町など地域づくりで全国的に有名な地域は、まちづくりを始めるに当たって、住民が学習会を始めて、全国他地

域や世界のいろんな地域と自分たちの地域を比べて自分たちの地域に何が足りないか、何が強みかをしっかり学習した上で、意思形成を行っている。そういったプロセスを是非開始してほしい。それを、県として後押しする、専門家が知見や技術でサポートする、そうした形で推進していくのがよいだろう。

○赤澤委員

第３部「めざす姿」は分かりやすいが、このように美しく整理されたことで、逆に地域性は見えにくくなっている。例えば阪神地域で際立たせるべき部分は、それぞれのめざす姿の間に潜んでしまっている。将来構想試案にシナリオ同士の関係をたくさんの線でつなぐページがあったように、関係する「めざす姿」同士をつなぐことで、それぞれの地域の新しい将来の姿が見えてくるということが表現できないか。

第４部「実現に向けて」では、いろんな個性の地域があり、それらを組み合わせることで一つの兵庫県としてよいものになる、ということを全県のビジョンとして示さなければならない。「みんなで共有する」は、均一化するということではない。同時並行で作成が進んでいる各地域のビジョンの違いを整理し、際立たせるのも全県ビジョンの役割だ。個性の違う地域のどこをどうつないだら兵庫県としての魅力、強みになるのか。離れた地域をつないで、どう全県にわたるプロジェクトを生み出すか。個性ある地域が集まった兵庫県だからこそできることを、第４部で強調してほしい。

○五百旗頭会長

個々の個性を大事にして、そこでなければできないものを引き出しながら、全県を包括するビジョンを描いていく必要があるとのご指摘だ。

○尾山委員

兵庫は五国というと、鳥瞰図のように上から見て五つの国に平等に投資するといった感じを受けるのだが、現実には、尼崎から姫路にかけての地域で兵庫県のGDPの80％が生み出されている。先ほど会長が言われたように、街から田舎へ、田舎から街へという縦の交流が必要だと思うが、やはり事業的には一番伸びやすいところへ資本投下した方がよいのではないか、というのが一つ目に言いたいことだ。

二つ目は、自立した経済について。地域に息づく経済を追求していくと、一つのコップの中のサイクルだけになってしまうが、兵庫県は平清盛の時代から海外との交流の出入口だった。1970年代半ばには世界第３位の港もあった。それが今は50位台にまで落ちている。即ち兵庫県、その中でも湾岸沿いの街は、海外との交流で栄えてきた。これをもう一度やるべきではないか。つまり、国内外との交流によって、県内にプロフィットが生れ落ちることで豊かになるという構造を再度作れないか。そのためには、海外から企業を呼び込む必要があり、閉鎖型ではなく、いろいろなものをオープンな形で進めていく必要がある。

三つ目は人口減少の関連。そのこと自体に対してどうすればよいのかはわからないが、医療・福祉サービスの充実を言う前に、病気になる前に病気を防ぐ「未病」、即ち健康で病気になりにくい身体をつくる、運動してできるだけ医療のお世話にならないようにする、医療費をなるべく急カーブで上げないようにするという事前の策が大事だと思う。医療産業都市があるから安心だ、ではなく、最後のところで科学の力で命を長らえてくれるということと合わせて、その前の健康を大事にする必要がある。

また、医療産業都市について言えば、点と点の動きではなく、そこから新たなワクチンが出てくるようなスケールを持つべきだと考える。

○五百旗頭会長

医療にサポートされるよりも、その前に自分でスポーツをして健康を保つように頑張るという視点を持つことは大変重要だ。

○尾山委員

健康への県民の関心は高い。アシックスでは県内に６つの機能強化型のトレーニング施設を持っており、少し腕が上がりにくい、足が出にくいという方が利用される。今は介護保険の中で運営しているが、今後オープン価格の施設も作りたい。自分の運動機能に少し不安があると、すぐにそうした施設に行って直そうという機運がある。

○笹嶋委員

「Ⅱ新しいことに挑戦できる社会」について意見を述べたい。「自由な学びが広がる社会」について、これをもう一歩進めて、一生学ぶことが当たり前の社会とした方がよいと思う。60～65歳で定年退職し、その後はそれまでの貯えを使って余生を過ごすというモデルはもう古く、平均寿命がこれだけ上がり、100歳を超える方がこれだけ増えたら、いくつになっても新しいことを学び、それを仕事にしていくようなことが当たり前にならないといけない。学び続けられるというよりは、大人になっても学ぶのが当たり前、学び続けるのが当たり前の社会をめざすべきだろう。

もう一つの「わきあがる挑戦」について、挑戦できる環境はすでにかなり整ってきたと感じるが、私自身ベンチャーをやっていた経験からすると、失敗したときに救ってくれるセーフティネットがまだまだ弱い。再挑戦を許してくれる社会、失敗してもそれがペナルティにならない社会、再チャレンジするときに資金面などで支えてくれる社会の姿が見えるようになるとよい。

「新しい文化の創造」については、すでに優れたコンテンツはあるが、それらの情報発信に課題がある。様々な芸術文化施設が県内にあるが、それらの情報発信が弱い。情報発信を強め、誰も取り残されることなく、あらゆる県民がデジタルディバイドなく、情報にアクセスできて、いろんな文化に触れたいときに触れられる、学びたいものも学べる、そういう社会をイメージできるビジョンが望ましいと考える。

○五百旗頭会長

先ほどはいくつになってもスポーツをという話だったが、笹嶋委員からは、いくつになっても学ぶのが当たり前の社会をというお話があった。

○笹嶋委員

スポーツも学びの一つだと思う。スポーツであれ、他の学びであれ、新しいことにいくつになってもチャレンジしていくことが当たり前の社会になればと思う。

○杉本委員

科学技術の観点からコメントさせていただく。兵庫県には先端の科学技術があり、伝統産業にも非常に良いものがある。これは全国的にも珍しく、兵庫県の利点である。しかし、これらは「共存」してはいるが「融合」はしていない。

この利点をうまく生かしていくために必要なのは「国際性」と「学際性」だ。まず「国際性」だが、めざす姿の「世界に広がる交流」は、うまくまとめられてはいるが、残念ながら、外から兵庫に来てもらうという交流がメインとなっているように見える。先ほど尾山委員が言われたように、交流は相互に行き交うことが重要で、外へ出て、外に学び、外で生かすという観点がもっと出てこないと伸びていかないと思う。

例えばアジアであればインドが、伝統産業と先端科学技術が融合したモデルの１つである。長期ビジョンが展望する2050年の世界を牽引している国の一つはインドではないか。それは、先端技術だけではなくて、伝統産業とうまく融合している地域が何か所かあるからである。それ以外でモデルになり得るのは東欧である。東欧にはベルリンの壁崩壊の1989年以降に独立した国が多いが、その後非常にうまく取り組んでいる国がある。そういう国に行って様々な情報を得て、兵庫県に生かすことができれば、先端と伝統が融合した日本でもトップレベルの産業県になると思う。

次に「学際性」である。一つの専門分野で非常に伸びている企業が兵庫県には多い。一方で、COVID-19で非常に大きな打撃を受けた企業と、そうでない企業の格差が激しい。伝統的な産業分野と、それとは異なる分野の２つの柱を持つことが非常に大切で、それがあれば、どのような世界になっても耐性のある企業になると思う。

例えば、アメリカのファイザーやモデルナがmRNAワクチンを作っていて、日本には残念ながらワクチンを主流で作った製薬メーカーはないが、だから日本の企業に力がないかというと、そんなことはない。先端技術とは関係がないような伝統的な醤油の技術をもった企業がmRNAワクチンの原料を作っているということがある。先端技術と伝統技術の融合を進めることができれば、日本も、兵庫も、将来的にポジティブな方向に向かうのではないかと思う。

○五百旗頭会長

先端産業と伝統的な土着の産業、それが並列して存在はするが、融合はしていないという意見である。醤油技術がワクチンにつながる、そういった融合の可能性をもっと探るべきだという指摘だ。

○タマシ委員

「一つになる世界」について話したい。現在、兵庫県立大学国際商経学部で正規学部生として115人の留学生が学んでいるが、国際交流の中身をもう少し深く考える必要があると思っている。特に留学生が４年間兵庫県で勉強して、その後どのような進路に進むのかを考えることが大切である。

学生たちは、今年の秋から初めて兵庫県内の様々な企業でインターンシップを行う。あと２年で卒業する予定だが、国際交流を深めるために、学生たちにどのような機会を与えられるか考えなくてはいけない。多くの学生から、兵庫県には魅力がたくさんある、あるいはボランティア活動をしたいといった声も聞いており、コロナ禍で少し難しい状況ではあるが、国際交流の機会をシステムとして深めていく必要がある。

神戸は海岸に位置し、世界から見ると日本の入口になっており、この場所で県の支援も受けながら、世界から留学生を受け入れていくことはとても良いことだ。これからは、卒業後に日本にいたい、日本で働きたい、日本のために働きたいという希望もあるので、その面での国際交流や、県内での国際企業の発展が望まれる。

○平田委員

骨子案の中で「新しい文化の創造」として、芸術文化のことに触れられていることに感謝する。私は「芸術が暮らしに彩りを与える」という表現がよいのかどうかということを申し上げたい。諸富委員からも指摘があったように、大企業や公共事業を誘致するような時代ではなくなってきた。これは昭和の高卒男子を地域に囲い込む政策、出稼ぎ集団就職をなくす政策であったと思う。これは見事に成功した。自民党政権が成し遂げた最も優れた政策の一つだったと思う。しかしこの成功体験にすがっている間に、70年代以降、高等教育の進学率がどんどん上がっていった。何より見誤ってしまったのは、90年代以降に女子の４年制大学への進学率が急上昇したことである。そうなると今度は、囲い込む政策ではなくて、戻ってきたくなるまちづくりをしなくてはいけなかった。それはまったく異なる発想が必要になるものである。

神戸、大阪、京都、東京での刺激的な生活を最低でも４年間過ごした22～23歳の男女が、なぜ但馬に戻ってこないのか、なぜIターン者、Uターン者が来ないのかということをより重点的に考える時代になってきている。戻ってこない理由は３つある。教育、医療、そして、広い意味での文化である。医療は、例えば豊岡には日本最高峰の救急医療の技術を持った病院がある。教育も最近、豊岡高校は非常に頑張って、国公立でもAOや推薦を使ってどんどん優秀な大学へ進学している。もう一つは文化である。私たちが取り組んでいるのは芸術だけではなくて、スポーツや食も含めた多彩な

文化が経験できるようにすることである。Uターンする方で子育て中の母親たちが下見をするときに見に行く場所は、もちろん、保育園、小学校、買い物の場所であるが、加えて絵本がきちんと揃っているかどうかといった観点で図書館を見に行く。さらに意外なところではスイミングスクールがあるかどうかも見ている。スポーツも子育てにとって大事なことである。芸術が暮らしに彩りを与えると書いてあるが、そういった広い意味での文化というものが暮らしの中核にあって、一人ひとりがその町に生きる価値を見出しているということが、これから重要になっていくのではないか。その町に生まれたからその町に暮らすのではなくて、住民が自治体を選ぶ時代になる。そうした時代において、文化政策は非常に大きな位置を占めるのではないか。

芸術文化観光専門職大学は、この４月に開学したが、全国から優秀な学生が集まった。平均倍率7.8倍という新設校では異例の倍率でスタートした。学生たちも頑張って勉強している。来月初めて、学生による演劇を上演する。上演に向けて現在、毎晩10時過ぎまで学生たちと芝居を作っている。先週チケットを売り出したところ、800枚が１週間で売り切れた。コロナで客席を半分にしているので、増席して倍にしても売れると考えている。豊岡は人口８万人なので、人口の２％が劇場にくる。神戸なら３万人にあたる。そのくらい地方でも文化に対する理解は広まっている。是非そういったところを政策の中心に据えていただきたい。

○五百旗頭会長

800枚はほとんどが但馬の人なのか。

○平田委員

ほぼ全員が豊岡市民である。

○五百旗頭会長

歴史を振り返ると、戦争まではお国のために命を捨てても頑張るという勇壮な気分が流行り、戦後は経済国家であるから、猛烈社員になって神風タクシーとなって突進する、家族のために働く、といった情熱があった。でも今は戦争も猛烈社員も「何それ」という時代である。それに対して今燃えているのは、文化やスポーツをやる人たちだ。平田委員が豊岡の地で大きな拠点を作ってくれていることは兵庫県にとって素晴らしい宝物であり、日本、世界にとっても意義深いことである。

○古山委員

今回の新ビジョンは非常によく練られていると思うが、２点ほどコメントしたい。

まず、第３部のまとめ方については、もう少し内容を完結に、インパクトのある形で伝えやすくする。つまり、受け手の記憶に残りやすくする工夫が必要ではないか。先ほど五国の違いを分かりやすくという話も出ていたが、県としてビジョンの周知を

図りたいのであれば、大胆に他県との差別化領域や目玉を明らかにした方がよい。もしそれが困難な場合は、共通する特徴を表すキーワードを明確にして、各項目においてもキーワードを意識的に使用してコンセプトを強調するということを提案する。

キーワードの一案としては「多様性」が考えられる。多様性は、第３部にある「自分らしく」や「誰も取り残されない」に直結するが、「新しいことに挑戦」の領域でも各人が関心ごとなどに基づいて、それぞれ新しいことに挑戦するという意味で多様性だし、「自立した地域経済」の中でも、多様な気候風土、多様な地場産業、多様な就労の形などに共通して多様性が関わっている。

二つ目は、先ほどセーフティネットの話があったが、リスク、失敗、違いを恐れない、そして非難しないという方向性を明言できないか。このことは、新しいことに挑戦できる社会や多様性の推進に必須である。例えば、教育においては、既定どおりの正解にこだわるのではなく、むしろユニークな回答や考え方を、勇気を持って発言するような子どもを育成すべきだという考え方になる。

Ｐ＆Ｇには「Learn from Failure」というキーワードがある。うまくいかなかった事案にこそ学びが多いため、失敗事例についても積極的にラーニングメモを作成して広く共有することが推奨されている。要するに「検討に時間をかけ過ぎるな」「リスクを恐れずにスピーディに新しいことに挑戦し、完璧でなくともそこからの学びを次に生かせ」という考えである。第４部の基本姿勢に「試行錯誤のプロセスを楽しむ」と書かれたことは評価するが、それだけではまだ甘い。試行錯誤は大歓迎だが、必ずスピード感を持ち、貪欲な学びをセットで進めることが大切だ。

○五百旗頭会長

Ｐ＆Ｇの取組を参照しながら「多様性」で括ってはどうかとの提案だ。独自の意見を排除するのではなく、それらを取り込み、次々にチャレンジしていく。多くのものを包摂して作り上げていく兵庫県であってほしいというご意見である。

○山本益嗣委員

淡路島は最近話題になることが多い。パソナの本社機能の一部移転を契機に、コロナ禍もあって、移住希望者が増えている。不動産業者の話では、賃貸物件が払底して、塩漬けになっていた別荘地に見学者が押し寄せているというありがたい状況になっている。NHKのブラタモリも淡路島に来ていただいた。

今日は３つお話ししたい。一つは、コンパクトシティについて。移住者が来ても人口は確実に減っていく。かつて24万人だった淡路島の人口は現在13万人で、2050年には７万人になるとされている。今年の春、洲本で第二小学校ショックというものがあった。私の母校で、洲本で最も古い小学校の一つ、洲本第二小学校の話だ。60年前、私が入学した時は１学年160人だったが、今年の入学者は６人だった。人口が減り、税収も減って、この島がどうなるのかと考えると非常に暗い気持ちになる。こうした

中で必要なことは、行政として、どこに人を住まわせるかということについて、ある種の決断と誘導をすることではないか。今でも島内を回っていると、街外れのミニ開発や山の中に別荘地を切り開いているところがある。そういうことをやっている時代だろうか。やはり、ある程度の規模の人が一定の場所に集住し、そこで安全に安心して住まえる地域をつくる、そうしたビジョンが全体としても必要だと思う。

二つ目は、地域共同体の再構築。従来、地域は神社のお祭りだとか、共同でため池を管理するとか、いろんな活動をしながら、共同体を維持してきたわけだが、残念ながらその担い手がどんどん減っている。私も町内会長をやっているが、どんどん町内会はさびれていっている。ただ、一つ面白い動きがあって、私の自宅の近くに、淡路島唯一の映画館である洲本オリオンがあって、今年の春から若い人たちが中心になって、そこで月１回、日本映画を上映する活動をしている。中心になっているのはニンジン農家の奥さんで、団体名をシネマキャロットというのだが、こんな場所の映画館がまだやっていた、久しぶりに来たというお客さんが毎回訪れてくれていて、文化の力というのを改めて痛感している。共同体を維持する一つの手段として、伝統行事や今の音楽、映画などの文化を生かしていくという視点を是非入れていただきたい。

三つ目は、知事にも伺いたいところだが、兵庫県庁はなぜ神戸にあるのか。各地域に県民局はあるが、全体のコントロールは本庁からしている。そういう時代なのか。兵庫県が五国だというなら、例えば農政は淡路、観光は播磨、教育文化は但馬が中心になって全体を動かすなど、そういう発想もあってもよいのではないか。

〇五百旗頭会長

独自の観点からご意見を頂いた。全国でもすべて東京ではなくて、防災は兵庫、商業は大阪、文化観光は京都というふうに機能別に多元化していくべきだと思っていたが、兵庫県の中でまずやってみようというご意見で、興味深く伺った。また、文化の力を地域共同体再構築の軸にしていくという具体的な事実に基づくご意見もあった。

〇吉富委員

大変分かりやすい良い骨子案である。これを絵に描いた餅にしないために、自身の専門である多文化共生の観点からお話ししたい。

先日来、加東市や豊岡市など県内各地を訪問して地域の話を聞く機会があった。例えば加東市では、アパート３棟程度に、ベトナム人、ミャンマー人やアフリカ系のたくさんの技能実習生の方々が住み、パナソニックの工場や地場産業の小さな工場で働いて、地域の産業を支えている。豊岡では、カニの漁船にインドネシアの方が乗船するなど、たくさんの外国人が漁業を支えている。このように、たくさんの国の人たちが地域の産業を支えているという事実はどこかで触れるべきだ。技能実習生も、特定技能のビザに切り替えたり、日本で結婚したりすれば、この先も長く日本に住むことになる。住民という意味では兵庫県の人口の中に外国人の人数も含まれているわけだ

から、この方々が誰一人取り残されない社会をつくらなければならない。

ビジョンであるから、希望や期待に満ちたものであって良いと思うが、第４部「実現に向けて」では、足元の地域の課題一つひとつの解決に地道に取り組むという姿勢も含めてほしい。例えば、技能実習生は日本人よりかなり低い賃金で働いている。地域の人たちは大切に受け入れているのだが、教育、医療、労働など様々な分野で格差を生まないようにしなければならない。自立した地域経済のために一時的な穴埋めにするという意識ではなく、地域を一緒につくる県民として誰も取り残されないという意識が、全体の住みよい社会につながるし、多様性や文化を大事にする、豊かなまちをつくることにもつながる。ビジョンに具体的な課題を一つひとつ記載するわけにはいかないとは思うが、そうした足元の課題に取り組む姿勢を記載してほしい。

〇五百旗頭会長

現在会長をしているアジア調査会でアジア・太平洋賞という顕彰事業をやっていて、今年の特別賞の一つに「ロヒンギャ危機」の研究を選んだ。仏教中心のミャンマーにいる、ベンガルをルーツとするイスラムの人たち＝ロヒンギャへの差別問題を扱った研究だ。元々イギリス領ビルマの時代に不幸な歴史的経緯があった。ミャンマーはインド・中国の商人が入って栄えたが、一方でインド・中国の資本家にどんどん富を奪われ、外部勢力の侵入に対して危機感を抱くようになった。その思いが背景にあって、ロヒンギャの人々を包摂するという対応ができずに排除する方向へ動いていった。そういった歴史を見るにつけ、今日の日本も危うさを孕んでいることを感じるが、本日の議論はまったく違った方向であって、地域の振興を多様性の中で包摂しながらやっていこうという非常に前向きなご意見であった。

〇突々委員

水産業の立場から意見を言わせていただく。第３部「めざす姿」の「Ⅳ自立した地域経済」の「進化する御食国」の最後に「獲る漁業から育てる漁業へ」と書いてある。この表現は栽培漁業を指していると思うが、SDGsでも海の豊かさを守ろうであるとか、昨年施行された新漁業法でも、新しい形の資源管理に取り組むことによって漁業を成長産業にしていくということが謳われているので、新ビジョンでは、できるだけ新しい言葉、未来に向けた言葉を使ってほしい。例えば「海の豊かさを守り持続可能な漁業と養殖業へ」など、抽象的ではあるが、いろんな法律や情勢の中で使われている言葉に代えた方がよい。

〇頴川委員

第３部「めざす姿」はコープこうべの「一人は万人のために　万人は一人のために」とまったく重なると思っている。私たち生活協同組合も今年100周年を迎えた。県下に170万人を超える組合員を抱えている。私たちにとっては人が財産であり、資源。

兵庫県にとってもそれは同じで、兵庫県を育てるのは人を育てることであるはずだ。
　コープは供給事業と社会活動を両輪にしている。コロナ禍で露見した社会課題の解決をいろいろ討議しているが、とりわけ子ども達の貧困、格差に注視している。つながり、つながる、つなげるが、私たちの得意技でもあるが、これこそが処方箋になる。人を育てて、地域を育てて、社会を育てて、さらにつながる力を持って、いろいろなところがつながっていくということが大きな推進力になると思っている。兵庫県としても、つながるということを強く表現していただきたい。そして、そこから具体的な方策をつくっていくことが大事だということを提言したい。

○五十旗頭会長
　コープこうべでは、子どもたちの貧困に対応する事業を行っているか。

○頴川委員
　ひとり親の家庭の子どもの高校への進学断念が、経済的な理由も含めて、非常に多くなっている。そこで、就学継続が困難な高校生のための奨学金制度を立ち上げ、この10月から進めている。80名の募集に対し、資料請求がダウンロードと郵送合わせ1,600以上という数字は現在の社会状況を表している。どんどんそういう取組を進めていきたい。家庭に月１万円ずつ返済なしでお配りする。高校に入って卒業するまでの３年間それを続ける。

○五百旗頭会長
　公的にやるべきことは、県としても努力はしているが、決して足りることはない。コープこうべをはじめ民間の事業者がそうした取組を自らやることは大変重要だ。

○頴川委員
　宅配事業もコロナ禍で非常に希望が増えて、兵庫県下で50万軒以上に宅配している。そうしたネットワークを通じて、皆さまがつながれるようにしていきたい。食料品などの通常の宅配だけではなく、それぞれの地域で、県とも協働しておむつを配ったり、弁当を配ったり、いろいろと応用が効くネットワークとして育てていきたい。

○勝沼委員
　全体的に大変丁寧な議論のプロセスを経て、バランスよくまとめられている。言葉の使い方も温もりのあるビジョンになっている。開かれた議論の経緯が見えて、これまで関わってこられた方々には経緯を表したい。特に「試行錯誤のプロセスを楽しむ」という基本姿勢が良いと思う。
　せっかくこれだけの方々が関わっているので、県民モニター、若手職員なども含め県民の方々からどんな意見が出て、それがどう集約されていったのかという経緯が、

今後出来上がるビジョンの中で何らかの形で見えるように工夫することで、なお理解が深まるものになるのではないか。

このビジョンは一体誰が読むのだろうか。多くの県民は、こういう作業をしていることを知らないし、ビジョンが出来上がっても、実際に手にとって、あるいはホームページで読むという人は少ないだろう。作って終わらせずに、成長するビジョンにするという基本姿勢も紹介されたが、これを叩き台にして、いかに地域の未来を考える具体的な取組につなげていくのかということが大事ではないか。

特に大事なのは若者である。コロナ禍で地方回帰の動きがあるという分析もあるが、一体誰のことを言っているのか。そういう流れを取り込むのであれば、より踏み込んだ調査や分析、研究が必要になるのではないか。

実際、私の周辺でも、非常に有望な、未来を夢見る若者たちは、今でも東京、海外に出て行ってしまっている。そんな若者が描くビジョンは、このビジョンとはまた違うものになるのではないか。例えば「子どもの意思を大人が尊重する社会」や「子どもの夢を大人がサポートする社会」など、子どもや若者の視点から描く構想があってもよい。若者版のビジョンが対になるものとしてあってもよいと思う。

そのためにも、30年後の社会の主流になる若い人たちの生の声を直接聞く場があってもよいのではないか。兵庫県を出て行った若者たちにオンラインで話を聞くなど、そういう試みを通じて、このビジョンをさらに肉付けしていくことが大事だ。

もう一つは、県がつくるビジョンである以上、どう政策として実現していくのかというところまで責任を持っていただきたい。ビジョンが描く社会の姿に対して現状はどうなっていて、どんな課題があって、それを解決するために必要な仕組みや制度、環境整備としてどんなものがいるのかということと照らし合わせて読めるような工夫がほしい。知事は若者の意見を聴く場を設けたいと仰っている。地域に出て行って仕事をするワーケーション知事室などの場も活用して、ビジョンと実際の政策、自分たちの社会で起きていることとのつながりを具体的に見せていってほしい。

○五百旗頭会長

知事が若者の声を聞く意向を持っているということをご指摘いただいて、生の声を受け止めながら、肉付けしていくという方向性を語っていただいた。そういう努力をこれからしていくわけだが、神戸新聞も他人事だと思わないで、立派なビジョンができたら、県民みんなに浸透するように是非協力をお願いしたい。

○勝沼委員

微力を尽くしたい。

○那須委員

働く側の立場から一点申し上げたい。骨子案のめざす姿「自立した地域経済」に

「循環が息づく地域経済」と書かれている。この内容は連合兵庫が掲げるビジョンとほぼ同じだ。連合としては「働くことを軸とする安心社会」を築き上げていこうとしている。キーワードが５つあり「学ぶことと働くこと」「暮らしと働くこと」「働く形を変える」「離職から就労へ」「健康と長寿をつくる」というもの。笹嶋委員からビジネスを行う側から見たセーフティネットの話があったが、働く側の立場としても、例えば失業した方がすぐに就労できる環境や、職業訓練のような場を充実していくこともセーフティネットとして重要と考える。働く側の立場と環境に視点を置いて「躍動する兵庫」を考えていってほしい。

○木築委員

但馬の地域づくりの現場に関わっており、環境やSDGsを推進している関係から意見を述べたい。いろんなものを究めていくとよく似たものになっていくのと同じで、このビジョンはかなりSDGsに似ているという印象である。誰も取り残さない社会、バックキャストの発想、サステナビリティなど、まさにSDGsを見ているような印象を受ける。この「持続可能」は全部に関わってくるキーワードだ。

タイトルの「めざす兵庫の姿」の説明にある「躍動する兵庫」の「躍動」という言葉は素晴らしいと思う。先ほど「学び続けられる社会」という言葉があったが、学んだものがアウトプット、つまり社会貢献につながらないと意味がないと思う。そういう意味も含めて、みんながそれぞれ活躍し合うというイメージが示された「めざす兵庫の姿」になっていて良いと思う。

「Ⅳ自立した地域経済」と「Ⅴ持続可能な社会」の建て付けについて、「Ⅴ持続可能な社会」がタイトルだけからは全部に関わってくる話に見えるので、例えば「Ⅳ自立した経済・産業」「Ⅴ自立した社会・暮らし」といった整理の方が良いように思う。その上でⅣの「活動を支える確かな基盤」をⅤへ移し、Ⅴの「地球の持続に貢献する産業」をⅣへ移すというのも一つの考え方だと思う。

最後に地域ビジョンについては、地域ごとの個性を大事にする必要があるので、内容を全県ビジョンに寄せていくようなことはせず、今のまま進めていきたい。但馬の地域ビジョンは、子ども達にフォーカスした表現を入れたり、パンフレットにSDGsのマークを入れたりして、グローバルな視点との相関を意識している。

○高品委員

「Ⅴ持続可能な社会」の関係になるが、基礎資料にもある通り、高齢化と人口減少を実感している。私の地元は養父市だが、子どもを見ることがほとんど無い。高齢者はたくさんいるが、元気でない高齢者も増えているように思う。独居高齢者も増えており、行く行くは空き家になっていくという状態で、限界集落が兵庫県でも増えているのではないかと思っている。

私は農業団体に所属しているが、兵庫県の農業者の平均年齢は70歳であり、あと10

年経てば80歳になる。将来農地を誰が担っていくのか、農業を誰が引き継いでいくのかを考えると、すでに危機的状態にあると思う。民間でこれに対処することは難しく、行政が何とか力を入れていかないといけない。行政はこれまで集落を基礎にしながら仕組みを作ってきたが、集落機能をこれからどうしていくのかということについて、改めて検討が必要と考える。

淡路の山本委員の話にもあったが、戦後いろいろな場所に人々が住むようになり、農業を中心にしていた時代から大きく変化した。長男が家を継ぐ習慣もなくなってきている。そのような中で集落組織という現場の対応をどう考えていくのかということを検討の俎上に上げてほしいと思い発言した。

○五百旗頭会長

大変シリアスな問題だ。民間では対処しきれない。行政の対応が必要だということだが、ではどのような対処、活路を行政や民間が見出しうるのだろうか。

○高品委員

解決策は見当たらない。行政は集落単位でどうするかを考えてほしいと言うが、そこの人が減って高齢化しており、そうはいかないというのが現実だ。そこで集落という単位をどう考えていくのかという議論を始める必要があると思っている。

○五百旗頭会長

農家の平均年齢が80歳になったら、今の農業はできないと思う。そうなると例えば企業を入れて牧畜をやる、果樹園をやる、すると土地制度も変えないといけない、ということで、根本的な変革が必要になってくる。みんなで一緒に考えないといけない大きな問題だ。問題提起に感謝する。引き続きアイデアがあれば教えてほしい。

○吉本委員

前回も言ったが兵庫県は日本の縮図だ。兵庫のビジョンがうまくできれば、おそらく日本も良くなるのではないか。その意味でこの骨子案は簡潔にうまくまとまっており、役所らしくない、なかなか良い文書になっているというのが第一の感想である。

2050年にどんな社会になったらよいかと考えたとき、参考資料には人口減少がどこまで行くか分からない、東京一極集中もなかなか止まらないなど、いろいろと課題が書かれているが、2050年くらいには人口減少や一極集中にある程度歯止めがかかるような社会を作っておかないといけないのではないか。そのためにも、若者にとって魅力ある暮らしが田舎でできる、プラス、ここだったら安心して子育てができる、子育てしたい、若者にそう思わせるような施策に集中的に取り組む必要がある。

日本の経済力が「Japan as No.1」と言われた頃からどんどん低下しており、ノーベル賞学者も数十年したらほとんど出なくなるのではないかと言われている。若者の教

育が非常に大切だが、そこで大事なのは個性を伸ばし、創造力を育むことだ。これからの時代に必要なのは、真似ではなく、自分で考えて行動する人だ。個性を伸ばした上に創造力を育む教育、この教育を大切にする必要がある。

それからもう一点、福祉の世界で社会参加と言うと、支える人、支えられる人と区分けをしがちだが、2050年ぐらいになると、いろんなものを使いながらすべての人が社会に貢献できる社会、みんながやりがいをもって社会参加し、みんなが社会に貢献していける、そのような社会づくりが進んでいるのではないかと思う。

○五百旗頭会長

そろそろ時間が来た。今日はいろいろな意見があった。すべてに答弁せよとは言わないので、県の幹部から順にコメントをいただきたい。

○城谷局長

委員の皆様方のご意見、深く感じ入りながら聞いていた。今私が心にしていることは一つひとつの課題に取り組むということだ。ついつい柱に気を取られがちなのだが、一つひとつの課題に取り組むことがすべてを拾っていくことになる、包摂ということになるのではないかと思っている。

今日はそれぞれの分野で、こういうことを入れた方がよいのではないか、強めた方がよいのではないかと、たくさんのご意見をいただいた。微力ではあるが、皆様方のご意見を改めて深く考え、見つめ直しながら、本体案作成に取り組んでいく。

○坂本参事

あれが書き足りない、これが書き足りないということをいろいろ考えさせられた。同時にそれらを全部書くと溢れてしまって、ご指摘のあったようなインパクトのある、分かりやすいものにならない。どういう風に整理するのがよいだろうか。

県民の皆さん、特に若い方々に、このビジョンをお伝えするには、もっと内容を絞った、端的なものを用意して話をする必要がある。その一方で、県民の皆さんがこれは自分のことだとわかるようなシナリオ、赤澤委員も言われた、未来のシナリオが重層的に重なって「これは自分の物語だ」と感じられるような、副読本のようなものを同時に用意するということも考えられる。先生方のご意見を反映し、かつ分かりやすく、インパクトのあるビジョンになるようにこれからも考えていく。

○谷口部長

５つのめざす姿について、バランスよくいろんな意見を頂戴した。なかでも「Ⅳ自立した地域経済」のところで、先端技術と伝統産業の融合の必要性や、自立した地域経済であるためにも国内外との交流が大切であるというご指摘、それから交流ということでは、留学生の活躍の場や技能実習生の課題もあるといった意見をいただいた。

「Ⅱ新しいことに挑戦できる社会」では、一生学ぶのが当たり前の社会をめざすべきであるとか、文化は暮らしの中核にあって生きる価値を見出すものだというご指摘、その一方で情報発信が弱いという課題や、医療・福祉サービスが充実するのはもちろんだがその前段である病気にならない取組が重要であるとか、本当に多様なご意見をいただいた。なかでも難しいと思ったのがキーワードでコンセプトをどのように伝えていくかで、坂本参事からもどうやって取り組むか考えていくという話があったが、若い方々などへの伝え方も併せてこれからよく検討していきたい。

○齋藤知事

委員それぞれの専門の分野、お立場を踏まえて、様々な角度からいろんなご意見を聴くことができ、非常に良かった。８月１日に就任し、コロナ第５波の真っ只中ということで、この２か月間、その対応にまさに専念をしてきたという状況が正直なところだ。ようやく第５波も落ち着きつつあり、県民の皆さんと意見を交わし、落ち着いた形で意見を伺って自分の考えも整理するという状況になってきた。平時であれば就任直後から県内を回りいろんな方の意見を聞き、どう動かしていくかを整理するのが本来の最初の１～２か月だと思うが、それがコロナでできなくなって、今ようやく進み始めたというところだ。

今日意見いただいた中で、キーワードは３つくらいあったと思う。１つはオープン。２つは連携で、国内外の様々なカウンターパートと連携してやっていく。３つ目は包摂。あらゆる方々を温かく包み込んで誰一人取り残さない。そうした３つのキーワードがこれからのポイントになるのかなと考える。

先般、議会の初日の提案理由説明で、県政の大きな方向性として躍動する県政ということを述べつつ、私の好きな司馬遼太郎の「坂の上の雲」を引用し、一朶の雲を見つめて目標に向かって進んでいく、ということを述べたのだが、今日のご意見を伺っても、本当に様々な分野に様々な課題がある。一つの分かりやすい目標を掲げてそれに向かって突き進んでいくことができれば分かりやすくてインパクトもあってよいが、平田委員からも話があったように高度成長期と違って、社会が成熟してきて極めて様々な課題がある、難しい時代になってきている。その中で、どうやって一朶の雲を形作って県民の皆さんにお示ししていくのかというところが難しくもあり、やりがいのあるチャレンジングな課題であると思っている。それをこれからしっかり腰を落ち着けて見出し、県民の皆さんに提示していくことが大事だと思っている。

兵庫県は500万人以上の大きな県だ。５つの地域からなり、都市型のベイエリアもあれば多自然地域もあるので、丁寧にバランスよくやっていかないといけない。540万人が乗る船をうまく時代の流れに合わせて舵取りするため、しっかり腰を据えて県の将来あるべき姿を見定めていく必要がある。

そのためにも今日頂いたご意見を踏まえながら、自分の目でいろんなものを見たり聞いたりしながら、目の前の課題を処理するということについつい専念しがちだが、

これから先、10年、20年先の県はどうあるべきかということをしっかり見定めていきたい。それがこれから新県政を進めていく上でのキーになっていくと思う。ここは腰を据えて未来を見据えて、どういった県を形作っていくのかということを私自身がしっかり考えていきたいと思っているので、委員の皆さんには引き続き様々なお立場からご提言、ご意見いただければと思う。

○五百旗頭会長

知事から様々な意見をしっかり受け止めるとの言葉をいただき、委員の皆さんの多様な意見が県のこれからの対処につながっていくという希望を持つことができた。

木築委員からビジョンはSDGsに通じるものがあるとの指摘があったが、言われてみると、そうかなという感じがする。ただ、SDGsは大変評判が良いのだが、私は必ずしもファンではなく、SDGsの主要な項目だけで17もあり、17も並べ立てたら逆に意味がなくなると言っている。人間は５つ以上のものはなかなか理解できない。何か意味のあることをしようと思ったら３つぐらいに絞らなければならない。17もあればどれか当たるだろうという面もないわけではない。また、よいことばかり書いてある。モーセの十戒には、殺すな、盗むな、嘘つくなとか書いてあるが、全部正しくて、古から今に至るまで真理である。では、人間はそれを守ることができたかというと、一度として殺しがなくなり、盗みがなくなった時代はない。

SDGsもよいことが書いてあって、例えば国連は、世界の貧困を15年で半分にするという目標を打ち出した。これは主として中国が経済発展したことで実現した。するとその後、次の15年で全部貧困をなくすという目標を掲げたが、これは人間と歴史への洞察が足りなかった。アフリカや中東など人類史の中でずっと貧しい地域があり、あらゆるところで全部貧困がなくなることはあり得ない。さらに半分にするといえば立派な目標で、頑張れば実現可能だったかもしれないが、そうはしなかった。つまりSDGsは羅列しすぎていることに加えて、実際の洞察は必ずしも伴っていないという欠点もある。しかし、それにもかかわらず、やはり貴重なものではある。

日本でも理工系人材を育てるのが最優先で、人文社会系は要らないという考え方の人がいる。科学技術は大事だ。兵庫県も先端技術を大事にしてきた県だ。しかし、最後に大切なのは、やはり人間だ。人文社会知で人間をどう方向付けるか、最後はそこの勝負だ。人類が滅亡せずに済むかどうか、最後のところは人文知で判断する。問題は人間が科学技術やAIを使いこなせるかどうかだ。そういう意味で人文社会的な方向性をSDGsはかなり健全な形で示している。17は多すぎるが、今必要なことを示しているという意味で、私も木築委員と同様にSDGsを参照するのは良いことだと思う。

知事から司馬遼太郎の言及があった。司馬遼太郎の面白さは、人と歴史を一つのドラマにしてしまうところだ。司馬小説を愛する若い知事のもとで、県民と歴史を一つに括るようなドラマをこれから是非展開していただければと思う。

（以上）